

第98図 須恵器窯体構造の変遷(2) (S=1/180)

焚口と煙出しを若干窄める程度の簡単な構造をもつ。舟底ピットはもたず、床面には馬爪焼台が設置される。

以上、各期の窯体構造について概述したが、各期間が窯体構造の画期にそのまま該当する。つまり、第1の画期は床面に傾斜をもつ焚口開口部と煙出しで窄まりを見せる従来の登窯構造から、床面に傾斜をもたない地下式構造で、煙出しの直立する形態へと転換する画期である。この画期は中村編年III型式2段階に畿内⁽⁶⁾（和泉陶邑窯？）で出現した平窯構造が当地域にもたらされたものと考えられるが、畿内で盛行する8世紀中頃には当地域では衰退の傾向を見せはじめる。第2の画期は地下式構造をもつ平窯形態から半地下式の登窯形態へと転換する画期であるが、その転換は他からの新しい窯構造の導入ではなく、第1の画期で、導入された平窯構造が衰退し、従来の登窯構造へと変化する形で見られ、それに伴って、窯体規模の縮小、床面傾斜の向上など、熱効率を重視した窯構造へと変化する。第3の画期は3期から継続する床面の急傾斜化に伴って導入された馬爪焼台と小型窯の出現が挙げられる。

以上の窯体構造の変化は南加賀古窯跡群全ての窯跡を対象として行ったものではなく、各時期の残りのよい主要な窯跡を抽出して検討したもので、細かい意味での画期の設定時期や各時期の内容に今後訂正される可能性を秘めている。今回の考察は窯体構造の変遷の大体の流れをつかむことを目的としており、他地域との比較検討または各施設の機能については、今後、北陸を対象としたこのような窯体構造の検討がなされる中で、再考の機会をもちたいと思う。

第2節 焼台及び窯道具について

今回の調査では、多くの形の焼台または窯道具が検出されたが、焼台は須恵器を再利用したものと焼台専用に製作された所謂「壺型焼台」、粘土塊を床面に張り付けた「馬爪焼台」の3つに分けられ、また、焼台以外の窯道具としては土師器窯・須恵器窯の両方で見られる匣鉢型のものが検出される。以下に、その形態ごとに述べる。

第1項 須恵器を再利用した焼台

この種類の焼台は須恵器窯跡の出現当初から見られるもので、その用途としては登窯という形態から窯詰め製品の滑落防止及び床面との融着防止が考えられる。現在検出された窯跡例としては8世紀代の窯に多く、今回調査した62号窯跡、60号窯跡、59号窯跡や那谷桃の木山1号窯跡、二ッ梨東山2号窯跡で確認される。その使用する器種や設置の仕方により8世紀前半と後半ではやや様相を違えており、これはその時代の生産する器種や床面の傾斜の程度に起因する。

まず、前半代のものについては、那谷桃の木山1号窯跡・二ッ梨東山2号窯跡で見られた、完形に近い壺蓋が外面を上にして設置されるものと、62号窯跡で見られた完形の無台壺を中心として伏せて設置されるものがあり、この他に内面を上にして甕の胴部破片も多用される。この時期の特徴としては、床面傾斜が緩やかであるため、焼台を設置する原因を積極的にはもたないが、強いて使用される場合は、その時代の食膳具での主要器種を使用し、設置状態は完形品を焼成部の一部に設置するという方法が取られていたようである。

次に、後半代では床面に傾斜が見られるとともに、製品の滑落防止を主目的として、その時期の主要器種である有台皿や無台皿の半欠品を使用し、伏せた状態で並べられる焼台設置の仕方を取る。この例としては今回調査した59・60号窯跡で良好な資料を得ており、その設置の仕方も、一部使用ではなく、焼成部上位から下位まで全般的に見られ、主に側壁沿いを中心として階段を形成するかのように設置している。皿類を優先的に使用したのは、この窯の床面傾斜がこの器種の身の高さに合致したこともあるが、当地域において最も生産が盛んとなる器種を使用したもので、床面が若干傾斜を急にする窯跡や主体とする器種の違いによって、無台壺や有台壺が同様の方法で設置されるものと考える。

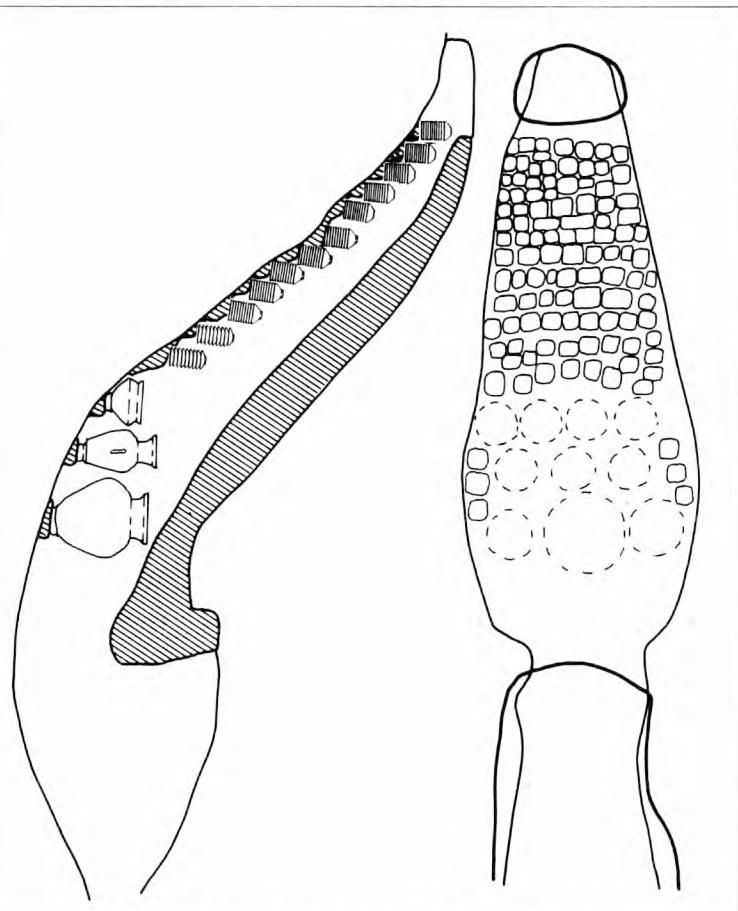
これ以後、9世紀代においてもこのような方法が取られた可能性が高いが、床面傾斜の向上に伴い、有台壺や無台壺が主体的に使用されたものと思われる。当窯跡群ではその具体例を確実に得ていないため、その実態については保留としておきたい。

第2項 馬爪焼台

馬爪焼台については窯体構造において若干触れたが、その出現は10世紀初頭頃と思われる。この時期は当窯跡群では須恵器食膳器具種が壺を中心とする組成に転換する時期で、この焼台をもつ窯の出現とともに、それまでの2～3割程度の壺類生産の比率が、7割近くまで向上し、他の皿Cや壺類は2～3割程度と低い占有率を示すものへと転換する。つまり、この焼台は壺類焼成のために導入されたものである可能性が高く、時代に則した壺類主体器種生産への転換と床面急傾斜化の進行に伴う製品滑落防止の最有力手段として、それまでの須恵器転用焼台に代わって、導入されたものであろう。

その使用状態としては、径20cm程度の粘土塊の上方を丸くまたは平坦にして、床面に貼り付け、第99図のような配置で並べられたものと思われる。製品の窯詰めはこの粘土塊の上に壺類を伏せて重ねられる場合が多かったようで、製品内面に付いた焼台の痕跡や高台リング状のくぼみをも

つ焼台が極めて少ないと
からそれが窺える。このよ
うな食膳具器種は主に焼成
部中頃より上で窯詰めされ
る場合が多く、焼成部下方
ではこの焼台の上に坯型焼
台または高台部分の破片を
塗り込んで固定するものが
使用され、広口鉢や長頸
瓶・双耳瓶など貯蔵具器種
が窯詰めされていたものと
考える。復元した戸津47号
窯跡の焼成部焼台は13段、
108個で、貯蔵具用の焼台は
3段、10個程度を予想した。
塊類の重ね焼きは天井まで
の高さが焼成部上方で30
cm程度、下方で80cm程度
と低いため、それほど積み
重ねることはできず、焼成
部上方では塊類で15~18枚



第99図 馬爪焼台の使用形態（戸津47号窯跡）

程度、皿Cでは13枚程度がやっとであったと考えられ、焼成部下方でも20枚を越えるものはなかつたように考える。

次に、その系譜であるが、尾張猿投窯の灰釉陶器焼成窯に見られる馬爪焼台に求められる可能性が高い。その根拠としては、まず灰釉陶器窯で出現する時期と当窯跡群で出現する時期が近いことで、形態もよく似ている。また、その前段階にあたる9世紀後半に当窯跡群においては尾張猿投窯の影響によって出現したと思われる灰釉陶器的器種や甕胴部叩き技法など尾張猿投窯の影響を受けたものが出現することからもそれが裏付けられるだろう。⁽⁷⁾しかし、尾張猿投窯に見られる馬爪焼台の窯には分焰柱（棒）が存在しており、その窯構造は根本的に異なっている。また、馬爪焼台の使用状態は猿投窯の場合、焼台上に高台リング状のくぼみが存在し、その重ね焼きも正位（内面を上にした状態）で行われている。この高台リング痕をもつ焼台は一回の焼成で焼き縮みするため、次の焼成では高台リング状くぼみが焼成前の製品の高台と径が合わなくなり、灰原に廃棄され、1基の窯跡の灰原から出土する馬爪焼台は2,000~3,000個、多いものでは6,000個近い焼台が出土する。⁽⁸⁾つまり、一回毎に馬爪焼台が付け替えられているわけである。灰釉陶器焼成

の場合は正位で焼かないと釉薬が垂れ落ちるという制約があり、製品価値としても須恵器とは根本的に質を異にしているため、一回毎の焼台の取り替え程度は苦にならなかつたものと推察する。当窯跡群に導入された馬爪焼台はその形態は同じであっても、その使用方法では基本的に異なつており、焼成ごとに馬爪焼台を取り替えるような労力を要する焼台使用の方法は取らず、当窯跡群独自で考えた使用方法が取られ、壇を焼成するのに適しているこの焼台の形態を真似て使用していたものと考えたい。この馬爪焼台は急傾斜な焼成部に段を作り、製品の滑落を防止するという第1の目的が最も重要であったようで、焼成部床面自体に段を形成してその上に焼台を貼付する形態のものも存在することからそれが窺える。⁽¹⁰⁾

第3項 坯型焼台

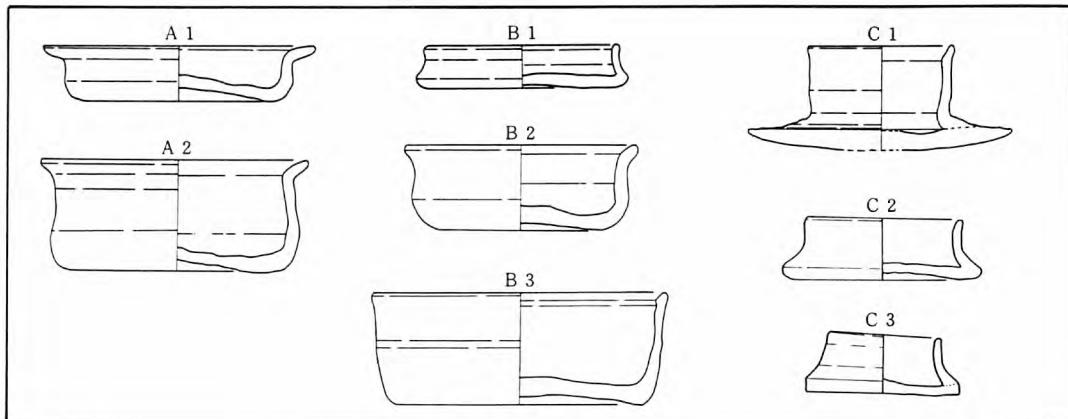
坯型焼台とは須恵器転用のものとは異なり、焼台専用として製作された須恵製の窯道具で、その器形が坯器形に似ていることから、坯型焼台として呼称する。

北陸地方ではこの窯道具の出現は8世紀中頃と予想され、当窯跡群では矢田野向山1号窯跡⁽¹¹⁾(III次窯に伴う可能性が高い)で、越中では小杉流通団地内遺跡群No16遺跡1・2号窯跡⁽¹²⁾で確認されている。この段階の焼台は数量的にも少なく、特殊器種にのみ使用したものと考えられ、その出現は当段階に導入される宮都的器種にともなって北陸地方に伝播された可能性が高い。畿内の当段階の窯跡でこのような焼台が検出された例を知らないが、北陸において期を同じくして出現する状況は他地域からの導入があったことを示唆するものと予想される。

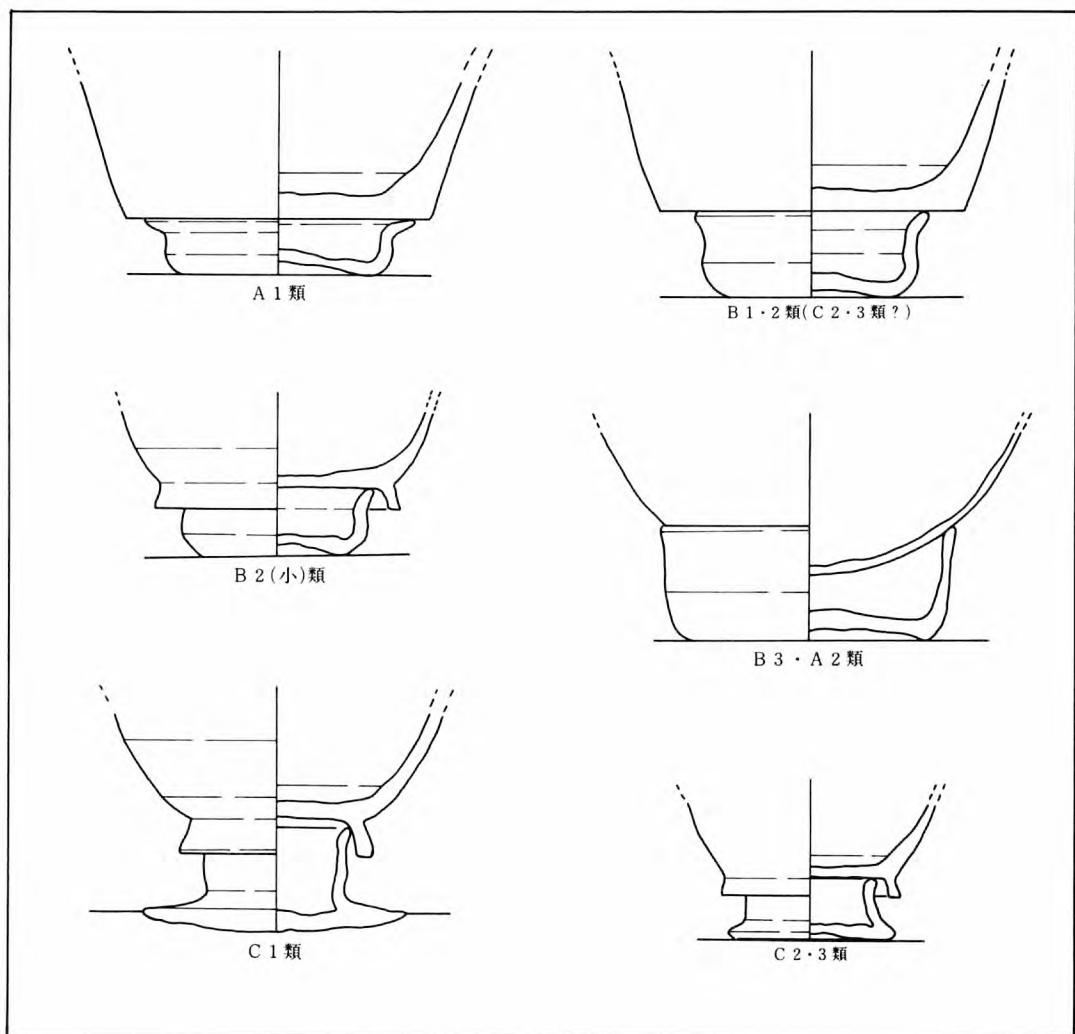
それ以後、8世紀後半は当窯跡群では検出しておらず、一時衰退の傾向を示す。矢田野向山1号窯跡のような特殊器種に使用される程度の特殊な窯道具として使用されていたのであろう。そのような意味で、8世紀代は坯型焼台の出現及び黎明期として位置付けられるだろう。

坯型焼台の普及は8世紀末葉から9世紀初頭頃急速に行われ、以後、10世紀中頃須恵器生産が終焉するまで一定量作り続けられる。この間、焼台の器形は多種多様で、これらの器形分類を試みれば、第100図のとおり、大きく3器形に分類可能で、口縁部の外屈するA類、体部立ち上がりが直立するB類、体部が内反または窄まるC類に分けられる。A類は器高から浅身の1類と深身の2類に分けられ、いずれも口径に大・中・小の法量が見られる。B類も器高から皿状の1類、坯状の2類、深身の3類に分けられ、口径に大小が見られる。C類は体部下端を強く内側に折り曲げて径を窄める1類と体部を内反気味に窄める坯型2類と内傾気味に窄める3類に分けられる。

これらの器形の消長と推移を見れば、A類は全時代を通じてみられる器形であるが、9世紀代は僅少で、10世紀以降主体となる。偏平な1類、深身2類いずれも存在するが、後者が主体的と言え、須恵器生産最終段階の戸津48号窯跡ではA2類に統一される。B類は全時代において比較的多く出土する器形で、1類は9世紀中頃から9世紀末まで、量的には少ないが、一定量検出される。2類が最も一般的な器形で、9世紀前半から10世紀代まで見られ、10世紀代に食膳具器種の底部糸切り技法の普遍化に伴ってヘラ切りから糸切りに転化している。3類は9世紀前半から9世紀末まで全般的に見られる器形で、形態的には変化しないが、9世紀後半に増加する傾向がある。



(第100図 坏型焼台分類図 (S=1/4))



(第101図 坏型焼台使用形態模式図)

C類は9世紀代に見られる器形で、10世紀代は消滅する。1類は9世紀前半を中心として主体的に使用され、9世紀後半以降は3類に変化しながら、数量を若干減少させている。以上まとめると、9世紀代はC類器形を主体とし、10世紀代はA類器形を主体とする傾向があり、B類器形は全時代を通じ、従的に使用される。焼台の数量は9世紀前半に普及するものの、けっして多いとは言えず、9世紀後半から末にかけて増加し、10世紀代の中で徐々に減少させている。

さて、壺型焼台の使用形態については、癒着資料から壺、瓶、甕類の貯蔵具の焼台として使用された形跡があり、食膳具に使用された例は現在のところ確認できていないが、61号窯跡で出土した焼台の量は貯蔵具のみに使用したにしては数量が多く、食膳具に使用した可能性も残されている。しかし、一般的には貯蔵具に使用される焼台として考えるのが妥当であり、その使用形態を模式的に図示したのが第101図である。貯蔵具には高台をもつものと平底のもの、丸底のものがあり、焼台器形はこれらの底部形態によって異なっていたものと考えられる。まず、A類については口縁部を外屈させて焼台上面を平坦にし、設置面を安定させることを目的とした器形と考えられ、特に、偏平で安定度の高いA1類は双耳瓶など平底の壺類に適している。A2器形は深身の点を考え、丸底のものにも使用した可能性がある。B類については、体部立ち上がりが直立する器形から製品との接点が小さく焼台の癒着率が低いという利点がある器形である。使用形態については偏平な1類は主に平底に、深身でも径の小さい2類は平底・丸底・有台いずれにも使用可能であるが、その中でも特に径の小さいものは有台に、3類は径が大きく深身である点から特に丸底に主体的に使用されたものと考える。C類については体部が窄まり、底部径より口縁部径が小さい点から、意図的に設置範囲を狭める形態で、高台の内側にはめ込む形で使用するのに適した形態と言える。1類は口径を強く窄める形態から特に有台のものに、2・3類は器高の低さから小型底径の平底のものにも使用された可能性がある。このような使用形態は各時代によっても変化するものと考えられ、はっきりとした使い分けはしていなかったものと思われる。

さて、壺型焼台の出土例については、当窯跡群以外では8世紀代に越中で小杉流通団地No16遺跡1・2号窯跡、古沢1号窯跡⁽¹⁴⁾、金沢で末窯跡群浅川3号窯跡⁽¹⁵⁾などにおいて確認され、北陸の比較的広い範囲で出土している。9世紀以降も箕打みやの窯跡等、石川県を中心として、確認されるようだが、出土量は少なく、南加賀古窯跡群のような多種多様な焼台の出土例は特殊と言え、北陸以外では会津大戸窯跡群⁽¹⁶⁾で知られるだけである。焼台出現の系譜や盛行の原因は現在のところ不明だが、9世紀以降の当窯跡群の壺型焼台発展・盛行は、当地独自の在り方を示していると言えよう。

以上、壺型焼台について述べたが、9世紀代で主流であったC類が10世紀代に入って消滅し、A類主体の器形に変化する状況は、使用形態から考えて、長頸瓶・短頸壺を主体とする有台器種から双耳瓶などを主体とする平底器形にその時代の主要貯蔵具器種が変化していることを推察させ、また、9世紀代に一定量見られた大型深身器形のB3が消滅することは甕の丸底器形から平底器形に変化することを予想させる。このような焼台の推移は十分な分析を行ったうえでの考察とは言えず、主な時代の焼台を抽出し、その傾向を出したものである。よって、今後、整理・検討

する中で、訂正される部分があると思われるが、今後の資料を見て行くうえでの1つの視点として提示しておきたい。

第4項 窯道具（匣鉢）

当窯跡群の土師器窯跡・須恵器窯跡からは平底で円筒状の器形を呈する器肉の薄いものが比較的多く出土しており、その器形が匣鉢に似ている。

この器種は土師器窯跡ではほぼ一般的に、須恵器窯跡からは10世紀以降個体数は少ないが出土するもので、前者は酸化焰焼成の土師質に、後者は還元焰焼成の須恵質に焼けている。法量はいずれも口径15~16cm前後、器高9~10cm前後を測るもので、器形に変化は見られず、底部の突出するものが多い。調整は粗く、内底面にカキ目を施すものが多いが、これは器肉を薄くする意図で施されたものであろう。

土師質のものは当窯跡群で土師器窯跡が出現する9世紀後半から窯体内に伴って出土する例が多く、ほぼ全時代を通じて見られる。用途としてはその筒状の器形から、食膳具を入れて焼成する窯道具の可能性が大きいが、その口径は碗・皿がぎりぎりに入るか入らないかの大きさであり、やや問題もある。しかし、内面の黒色化しているものや赤色塗料の付着するものが見られることは黒色土器を焼成するのに使用した痕跡とも考えられ、前記した用途が最も可能性としては高い。匣鉢の用途としては、施釉陶器の素地を焼成するなどの釉薬が掛からないようにするためにや、匣鉢に入れて積み重ねることで、多くの製品を焼成するために使用されたとする見方がされてきたが、土師器窯跡では前者の目的は当てはまらず、黒色土器を焼成するのに必要であった可能性と匣鉢を使うことによってより高く重ね焼きできる利点があった可能性を提示しておきたい。しかし、いずれもその根拠に欠け、その用途ははっきりしていないのが、現状である。

次に、須恵質のものについては、10世紀初頭前後より須恵器窯跡内において、少量ではあるが、各窯に普遍的に見られ、それに伴ってかほん同じころより須恵器窯跡内で土師器の出土が少量ながら、頻発する。また、この須恵質のものは蓋または匣鉢同士の重ね焼きのためか内面に降灰したものはなく、器内は密閉状態であったことが窺える。これらから端的にその用途を考えれば、土師器焼成に使用されたとする見方ができるが、匣鉢内にそのような痕跡はなく、確固とした根拠はない。しかし、土師器窯跡において窯道具として使用されたとする見方が妥当だとすれば、土師器が須恵器窯跡で出土するようになると同時に出現することは単なる偶然とは考えられず、土師器用の窯道具として須恵器窯跡に用いられたとする考えが自然である。

以上、匣鉢について述べたが、その系譜については不明である。しかし、土師器窯跡に導入された窯道具であることは確実で、当地に土師器窯跡の窯形態が導入されるとともに伝播したものと考えられる。ただし、このような匣鉢と器形は異なるが、9世紀代にはすでに施釉陶器焼成窯で匣鉢が使用されており¹⁸、土師器食膳具器形が施釉陶器器形を模倣したとする考えができれば興味深い。しかし、現状では、以上の見解は推定の域を出ず、その使用形態に関しては不明であり、今後黒色土器の焼成の仕方とも合わせ、使用方法・使用意図について再考の機会をもちたい。